

氏名(本籍)	おか ざき しん じ 岡 崎 慎 治 (広 島 県)		
学位の種類	博 士 (心身障害学)		
学位記番号	博 甲 第 2492 号		
学位授与年月日	平成 13 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	心身障害学研究科		
学位論文題目	注意欠陥/多動性障害児の連絡遂行課題における行動抑制とその発達の生理心理学的研究		
主査	筑波大学教授	博士(心身障害学)	前川久男
副査	筑波大学教授	医学博士	宮本信也
副査	筑波大学教授	教育学博士	吉野公喜
副査	筑波大学助教授	博士(心理学)	吉田茂

## 論文の内容の要旨

注意欠陥/多動性障害 (Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder, 以後 ADHD) 児の持つ問題は近年では行動抑制の困難であると考えられてきている。本研究は、この行動抑制を検討するにあたり、行動指標として連続遂行課題 (Continuous Performance Test, 以後 CPT) のうち、警告刺激の直後に出現する標的刺激にのみ反応を求める CPX-AX を用いた。また、生理指標として CPT 遂行時の事象関連電位 (Event-Related Potentials, 以後 ERP) を記録した。これらの指標の結果と行動抑制に係わる理論的モデルを関連させ、行動抑制の発達と ADHD 児に用いられている薬物療法との関連を含め生理心理学的に明らかにすることを目的とした。

健常児、健常成人を対象にした検討から、遂行成績に発達的な変化が認められることが確認できた。また ERP における P2 成分 P3 成分の様相から、年齢の低い段階では反応の実行と抑制処理の分化が不完全であり、より早期の視覚刺激の定位、求められる反応との関連性の低い刺激処理の認知抑制過程の負荷が高いことが推察できた。

ADHD 児と同年齢の健常児の CPT 遂行成績を比較した結果、ADHD 児の行動抑制の発達は健常児に比べ遅れること、ADHD 児の実行機能の問題と考えられる時間感覚の弱さが認められた。CPT 遂行時の ERP においては、ADHD 児の P2, P3 成分は同年齢の健常児に比べ潜時が不安定であるとともに振幅が低かった。このことから、ADHD 児においては刺激処理の活性化が不十分であることが推察された。

CPT 遂行成績ならびに遂行時の ERP と薬物療法との関連を検討したところ、薬物を服薬した条件においては遂行成績が向上した。また服薬した条件では ERP の P2 成分に年齢群、刺激の種類にかかわらず振幅の増加を認めた。これらのことから、ADHD 児における行動抑制の困難さ、自己制御、実行機能の問題が薬物療法によって改善すること、またその刺激処理過程において、駆動される刺激処理を本来の発達水準に近づける効果が存在することが明らかになった。

これらの検討を通して、ADHD 児における行動抑制の困難が刺激処理の様相とその発達における問題であることを実験的に明らかにできた。また薬物療法がこの刺激処理に影響し、ADHD 児の刺激処理とその発達を適切にすることが示された。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

近年、教育現場で問題とされることが多いADHD児の行動抑制を連続遂行課題（CPT）を用いて詳細に検討したものである。ADHDに関する膨大な文献的検討から、衝動性および多動性の著しいADHDは行動抑制の障害がその本態であることを指摘し、行動抑制を検討するうえでCPTが適切な方法であり、刺激間隔を操作することでより高年齢の子どもの評価が可能なことを示した。同時に事象関連電位を用いCPT遂行時の脳内処理過程を発達的に検討し、ADHD児においては刺激処理の脳内過程の活性化が不十分であることが示され、同時に薬物により健常児と同様の活性化が生起することを示した。発達に関して経年的な検討がなお必要と判断されるが、困難な実験を着実に積み重ね横断的データではあるが行動抑制の発達過程を生理心理学的に明らかにし、新たな知見を提供した点で今後の臨床ならびに研究に大きく貢献するものと考ええる。

よって、著者は博士（心身障害学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。